

Museum News



絵：柳田 基

2024 展覧会

企画展

大学博物館開館10周年記念
天を見あげて
—関西学院のヴォーリス建築—
2024.9.28(土)▶12.14(土)

※詳細は最終ページをご覧ください。

平常展

NOBLE STUBBORNNESS
—関西学院大学体育会のあゆみ—
2025.2.17(月)▶4.26(土)
休館日：日曜日、祝日

キリスト教主義教育を理念とする関西学院は、スポーツを通じた学びに力を入れてきました。原田の森キャンパスの庭球部で生まれた“NOBLE STUBBORNNESS”という標語は、現在も関西学院大学体育会に受け継がれています。戦争や大学紛争(大学闘争)、スポーツ選抜入試の中断を経験してきた関西学院大学体育会の歴史について、大学博物館で初めて紹介します。

次の10年を見据えて

10周年となった博物館

関西学院大学博物館は、2014年の、学院の125周年の創立記念日である9月28日に開館しました。今年(2024年)の同日で、開館からちょうど10年が経過したことになります。多くのみなさまに直接、間接に支えてもらって迎えることができた10周年であり、ここに改めての感謝を申し上げたいと思います。

博物館の開館に向けて準備室が設置されたのは、2008年4月のことです。この時期の「博物館開設準備室通信」の第3号(2010年秋)には、博物館のコレクションの収集方針として、「1. 関西学院に関する歴史史料およびキリスト教関係資料 2. 関西学院の教育研究活動の成果として展示できる資料および関連資料 3. 関西学院所蔵美術品関連資料 4. 美術品等のデジタルデータ 5. 西宮および京阪神の文化、芸術、歴史に関する資料 6. 学芸員課程実習用の資料 7. 新月文庫(教職員・生徒学生・卒業生の出版物)」の7項目をベースとすることが示されています。

こうした方針は、ときに区分が曖昧になりつつも、おおむね現在にも引き継がれており、そのうち、とくに1から3、そして5に分類される収蔵品は、展示を通して、順次公開してきています。ここ数年は、学院の歴史にかかるトピックを平常展として、館の収蔵品を中心に特定の人物やテーマにかかる事柄を企画展として、それぞれ公開しています。そして、企画展については、継続して図録を作成しています。図録は、担当学芸員をはじめとして、関係者に大きな労力を提供してもらう形で完成するものですが、図録として展覧会の記録が残ることの意義は大き

いと思います。館として、今後も継続していきたい取り組みの一つと考えています。

コロナ禍を経て

ところで、準備室時代から室長を務めた、河上繁樹初代博物館館長は、開学博物館を「人とモノが出会い、知性と感性が融合する展示空間」としていくことを掲げていました(「関西学院大学博物館通信」第1号、2015)。展示内容を継続して記録していくことの意義も大きいものですが、博物館という場としては、そこで展示される実際のモノを通しての「出会い」が極めて重要なことはもちろんでしょう。しかし、この「出会い」が果たせない時がありました。コロナ禍による影響によってです。政府による「緊急事態宣言」を受けて、博物館でも2020年4月9日から長期の休館を余儀なくされました。同年度の9月に、展示は再開されたものの、入館は学内者に限る期間が継続し、学外者の入館が可能となったのは、2022年3月のことでした。学内に対してのみでなく、広く地域に向けても開かれた博物館としてであろう、というのは初代館長から継続して本館が重視してきた点でした。そのように「開く」ことのできなかったこの期間は、他の多くの美術館・博物館とともに、ストレスのかかる時期でありました。

つづく10年へ

コロナ禍は、他方において、いくつかのデジタル技術を社会に定着させるという契機ともなりました。それらが博物館の展示にもたらす効果もあろうかとは思いますが、やはり、この時に自覚されたのは、「モノと人の出会い」の大切さであったかと思います。と同時に、この折にも記録としての図録の存在は存外に大きなものでした。こうした経験を踏まえつつ、資料を含めたコレクションの充実と保持やその展示といった基礎的な活動とともに、モノを主役として、地域にも開かれた場でありつつ、その活動の記録をしっかりと残すこと、を意識し、この博物館を次の10年に向かってつないでいきたいと思っています。

(大学博物館長 濱田琢司)



大学博物館の除幕式(2014年9月28日)

展覧会報告 I

平常展

ヴォーリス建築写真展

VORIES TIME

写真家・桃井一至氏の作品を通して全国各地にあるヴォーリス建築の魅力をご紹介します。

2024.5.13(月) ▶ 7.13(土)

※休館：日曜日

後援：公益財団法人近江兄弟社、西宮市

開館日数 54日

入館者数 3,729人

開館10周年の感謝を込めて

ヴォーリス建築の展覧会

関西学院大学博物館は、学院の創立125周年を記念して2014年9月28日に西宮上ヶ原キャンパスに開館し、本年度10年目を迎えました。コロナ禍による中断もありましたが、開館以来、1年に約4回の展覧会活動を続けてくることができました。展覧会の開催また博物館の運営にあたり、ご支援を賜りましたすべての関係者の皆さまに改めて感謝を申し上げます。

開館10周年を記念した展覧会では、本年没後60年を迎えるW. M. ヴォーリス (William Merrell Vories, 1880-1964) の建築設計をテーマに選びました。大学博物館が入っている建物は、ヴォーリス率いる建築事務所が設計した時計台 (旧図書館) です。学生数や蔵書数の増加に対応するため増改築が繰り返されましたが、外観の主要部や玄関、階段、2階の旧閲覧室などは現在も1929年の竣工当初の姿を留めています。1997年に建物の西背後に新大学図書館が開館し、図書館としての役割を終えた後も、時計台と呼ばれ親しまれてきました。またこの建物は、2009年に国の登録有形文化財に登録されました。

全国にあるヴォーリスが手がけた建築、通称「ヴォーリス建築」は現在も多くの人に愛されています。そこで大学博物館はヴォーリス建築の価値を再認識する2つの展覧会を企画しました。写真家・桃井一至氏の写真を通して全国各地のヴォーリス建築をご紹介します本展、そして関西学院のヴォーリス建築を総覧する展覧会 (最終ページ参照) です。

桃井氏は滋賀県近江八幡市にある近江兄弟社学園 (現在のヴォーリス学園) で幼稚園から高校まで学ばれ、校舎はもちろん学園周辺にある

ヴォーリス建築にも親しみながら育ったそうです。上京後、ヴォーリス建築が全国各地にあることを知った桃井氏は、その姿を撮り続けてこられました。本展は早稲田スコットホール (2017年) やソニーストア大阪 α Plaza (2019年)、ヴォーリス学園ハイド記念館 (2022年) で開催され人気を博した写真展です。大切に引き継がれてきた各地のヴォーリス建築を、桃井氏の作品からご覧いただきました。



▲会場の様子

作品の展示順序は桃井氏とともに決めました。会場中央には作品に登場するヴォーリス建築やその関連施設について紹介するパンフレットを集め、自由にお持ち帰りいただけるようにしました。



▲時計台を撮影した作品と桃井氏
展示作品の詳細は博物館のWebサイトに掲載している出品リストをご覧ください。



◀講演会の様子

ヴォーリス建築写真展

KAZUSHI MOMOI



桃井一至撮影 上：ヴォーリス学園教育会館 / 滋賀県近江八幡市。下：ヒアソン記念館 / 北海道北見市

VORIES TIME

2024.

5.13(月) ▶ 7.13(土)

開館時間：午前9時30分～午後4時30分(入館は午後4時まで)
休 館 日：日曜日
施設：関西学院大学博物館 (西宮上ヶ原キャンパス(時計台))
(近畿大学附属学園(旧山崎ビル)でも展示予定。また、各学舎、各学部の展示スペースでも展示予定)
(入館無料)
後援：公益財団法人 近江兄弟社、西宮市



開催記念対談講演会

「ヴォーリスさんと建築の物語」 ～光と風と バンザイなこっちゃ！～

会期中の2024年5月31日(金)には桃井氏とヴォーリス記念館館長の藪秀実氏による対談講演会を文学部チャペル (1929年竣工のヴォーリス建築) で開催しました。藪氏からはヴォーリスの人物や建築の特徴を、桃井氏からは撮影時のエピソードをユーモアを交えてお話しいただき、約170名で満員の会場は熱気に包まれました。

展覧会関連イベント

カメラを通して見るキャンパス

6月14日(金)には時計台の実習室にて「写真家に教わる！ヴォーリス建築カメラレッスン」(共催：OMデジタルソリューションズ株式会社)をおこないました。桃井氏に撮影テクニックを教わり、時計台や学部校舎など上ヶ原キャンパスを印象づける建築群の魅力をOM SYSTEMのデジタル一眼カメラで表現してみるイベントです。撮影後は、それぞれお気に入りの1枚を発表し、桃井氏に講評いただきました。15名の参加者からは「スマートフォンではできないような細かい技術なども多くあり、もっと詳しく学んでみたいと思いました。」「写真の楽しさを感じた会でした。普段ではあまり意識しない関学の建物の美しさを更に感じた機会になりました。」などの声が寄せられました。当日の様子は学院のYouTubeにてご覧いただけます。

YouTube QR コード▶
(<https://youtu.be/TAhUfUYWz1Y?si=3qoH4AsD-a8OG828>)



展覧会報告 II

平常展

学生たちの大学昇格

—関西学院新聞からみる学院史

特集陳列

カラフル！ 技でみる日本の蔵書票

平常展では関西学院新聞を中心に大学昇格運動についてご紹介しました。
特集陳列では技法に注目した蔵書票の展示をおこないました。

2024.7.29 月 ▶ 9.14 土

※休館：日曜日(但し8月4日(日)は開館)

8月10日(土)～21日(日)

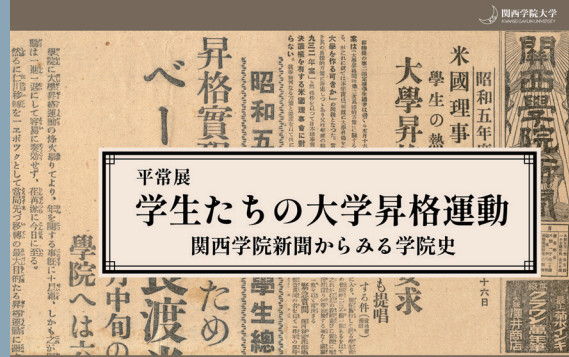
開館日数 33 日

右上：関西学院新聞 第52号 1面(1930年5月20日付)

左上：関西学院新聞 第60号 1面(1931年1月20日付)

右下：松原秀子《童》(1986年)

左下：見代ひろこ《たそがれ》(1994年)



2024.

7.29 月 ▶ 9.14 土

関西学院大学博物館(西宮上ヶ原キャンパス時計台)

開館時間：午前9時30分～午後4時30分(入館は午後4時まで)

休館日：日曜日(但し8月4日は開館)、8月10日(土)～21日(日)

〈入館無料〉



大学博物館は年に数回、学院の歴史をご紹介する「平常展」という展覧会を開催しています。博物館を訪れてくださる皆さまとともに本学が歩んできた道のりを振り返り、未来を築く礎としたいと考えています。

関西学院史の転換点

大学設立までの道のり

関西学院に大学が設立されるまでには長い道のりがありました。1914年の理事会ではすでに既存の高等学部を「昇格」させる形で大学を設立する案が話し合われていましたが、実際に大学予科が開設されたのは1932年でした。

1918年、大学令の公布により、それまで国立大学だけに許可されていた学位の授与が私立大学にも認められました。これをきっかけに、高等学部の学生会を中心として「大学昇格運動」がはじまります。この運動は学院の大学設立を目指す理事会を後押しする形で進められました。平常展では大学昇格運動について1922年から続く学生新聞、関西学院新聞を通してご紹介しました。



▲平常展の様子
紙面の一部をA1サイズに拡大した画像パネルを設置しました(一番左)。

熱気と強い意志

関西学院新聞が伝える学生の姿

当時の関西学院には学生たちの自治組織である学生会がありました。1922年に学生会の言論媒体として刊行されたのが学生会時報、のちの関西学院新聞です。常に学生目線で記事が決められており、その時々学生たちの関心事がうかがえます。たとえば1929年のキャンパス移転後には大学昇格に関する記事が繰り返し1面に掲載されていることから、この時期に大学昇格運動が勢いづいていたことがわかります。展示室ではA1サイズの拡大版パネルを設置し、実際に紙面が読めるように展示しました。

また、記事の本文とは異なる側面から当時の学生たちの姿を伝えてくれるものとして、本展ではカット(コマ絵)や新聞漫画にも注目しました。新聞部員だった辰井淳(1934年卒)のカットや漫画には、詰襟の制服の着こなし方や時計台の裏から眺める学院の風景、人でいっぱい西宮北口のプラトホームなど、学生たちの日常が切り取られています。親近感あふれるカットは解説パネルに掲載し、ご紹介しました。

カラフル！

多様な技法で作られた蔵書票たち

特集陳列では実業家である原野賢吉氏が蒐集し、2007年に当館に寄贈された原野コレクションの一部を紹介しました。蔵書票、豆本、小説、その他関連資料からなる本コレクションは総数2,000点を超え、現在もその整理と調査が続けられています。今回は蔵書票の技法(版式)の豊かさや票主たちの鑑賞方法の広がりや蔵書票の

「カラフルさ」と捉え、その特徴がよく表れた作品を出品しました。

日本の蔵書票の特徴は技法の豊かさにあります。そこで本展では、板目木版、木口木版、メゾチント、エッチング、シルクスクリーン、孔版、新孔版、型染、合羽摺、リトグラフの10の技法ごとに蔵書票を展示しました。展示を通して版式による作品の風合いや、作家たちの表現技法の違いを見比べることができるよう配慮しました。

▼特集陳列の様子

額装した蔵書票を技法ごとに展示しました。展示ケースには書票集が並んでいます。



また、蔵書票は本に貼って使われる以外にも、書票集として楽しまれています。書票集とは、白紙の本に蔵書票を一枚ずつ貼って選集にしたものです。本展では、蔵書票の鑑賞方法のひとつとして書票集を出品しました。これら書票集からは、蔵書票が道具として使われる姿のみならず、票主たちによって蒐集・愛好されてきた姿が浮かび上がります。また、書票集はほとんどが小部数のみ作られた限定版で、趣向を凝らした装丁のものが多くあります。これらの書票集をとおして、珍しい煌びやかな書物たちをご覧いただきました。



開催中の企画展

大学博物館開館10周年記念

天を見あげて 関西学院のヴォーリズ建築



図面：図書館（時計台）東立面図（部分）1927年
株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所蔵

1929年、関西学院は創立の地である原田の森キャンパス（現在の神戸市灘区）を去り、上ヶ原（現在の西宮市）へやってきました。この新校地の設計を任されたのは、W. M. ヴォーリズ率いるヴォーリズ建築事務所です。ヴォーリズは原田の森キャンパス時代から校舎や寮、宣教師館などを手がけ、学院の発展はヴォーリズ建築とともにありました。

ヴォーリズが図書館として設計した上ヶ原キャンパスの時計台には、現在大学博物館が入っています。そして2024年、ヴォーリズは没後60年、大学博物館は開館10周年を迎えます。これを記念し、本展では関西学院のヴォーリズ建築をご紹介します。図面や写真、実際に使われた器物などの資料から、建築の構想と建物の詳細をお楽しみください。

展覧会は4章構成です。1章は「ヴォーリズと関西学院」と題し、ヴォーリズが初めて関西学院を訪れた日の記録や、彼と学院をつなぐ精神的な礎についてご紹介します。2章では原田の森、3章では上ヶ原キャンパスのヴォーリズ建築を総覧します。建築図面や当時の写真、建設工事請負契約書などの展示のほか、学院の沿革と次々に建てられていく建築群を俯瞰できる大型パネルも設置しています。4章は「図書館（時計台）」として、時計台の意匠に注目しま

2024年9月28日(土)～12月14日(日)
※休館：日曜日、(但し11月24日(日)は開館)、
10月28日(月)、11月18日(月)、11月23日(土)
会期中、展示替えをおこないます。
展示資料の詳細はWebサイト掲載の出品リストをご覧ください。
1期 9月28日(土)～10月26日(土)
2期 10月29日(火)～11月16日(土)
3期 11月19日(火)～12月14日(土)
協賛：株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所
後援：関西学院大学建築学部ヴォーリズ研究センター、西宮市
協力：株式会社竹中工務店

す。竣工時の時計台ロビーの階段手すりには23個のアイアンワーク（金属製の装飾）がありましたが、戦時下の金属供出ですべて失われました。本展ではこの装飾の木製模型を制作し、実際に手すりに設置して展示します。これまで幾度も展覧会でアイアンワークの写真を紹介してきましたが、模型によって初めて立体的に見る竣工当時の意匠は想像以上に美しく、機能的な配慮とともに装飾性にもこだわるヴォーリズ建築の姿を改めて実感できました。それと同時に、日常にあった美しいものすべて飲み込んでいく戦争の恐ろしさを感じます。2025年は戦後80年です。博物館では模型公開とともに寄付金を募り、铸造での復元を目指します。この復元を通して、みなさまと平和への思いを共有できればと願っています。寄付についての詳細は

QRコードからご覧ください。

寄付金の詳細▶
(https://www.kwansei.ac.jp/cms/kwansei_museum/img/exhibition/2024/寄付金募集チラシ.pdf)



キャンパスの拡充のなかで解体された建物もありますが、ヴォーリズが建築設計を通して蒔いた種は今も学院のなかに生き続けています。キリスト教の宣教師であるヴォーリズと関西学院のかかわりとともに、学院を象徴する建物群に想いを馳せる時間となりましたら幸いです。

【開催記念講演会】 「関西学院とヴォーリズの歩み」

講師：山形 政昭 氏

(関西学院大学国内客員教授)

田淵 結 氏

(関西学院大学名誉教授、
関西学院 元院長)

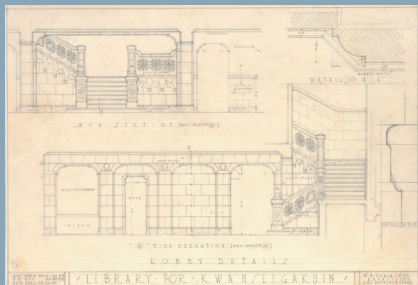
日時：2024年9月28日(土)

14:00～15:40

会場：西宮上ヶ原キャンパス

社会学部101号教室

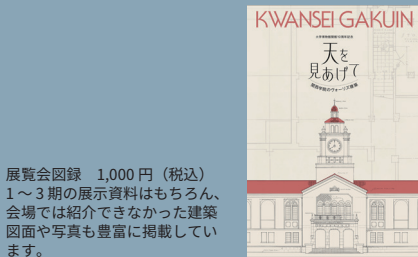
後援：意匠学会



図書館ロビー詳細図 1928年（3期展示）
所蔵：株式会社一粒社ヴォーリズ建築事務所
撮影：清水茂



階段手すりアイアンワークの木製模型 2024年（通期展示）
石榑智和、安澤広晟、芳村海渡
撮影：藪口雄也



展覧会図録 1,000円（税込）
1～3期の展示資料はもろろん、
会場では紹介できなかった建築
図面や写真も豊富に掲載してい
ます。



関西学院大学博物館通信 第17号

KGU MUSEUM NEWS No.17

2024.10.30

関西学院大学博物館

〒662-8501

西宮市上ヶ原一番町1-155

TEL 0798-54-6054 FAX 0798-54-6462

URL <https://www.kwansei.ac.jp/museum>